歴史地震
第 22 号(2007) 215 頁

［講演要旨］文禄五年伏見地震での伏見城下武家地の被害状況

松岡祐也（東北大学大学院研究生）

１．はじめに

文禄五年伏見地震（以下、伏見地震）は文禄五年閏七月十三日（1596.9.5）の子刻（午前０時）頃に発生し、京都・伏見を中心に畿内で大きな被害を与えた地震である。この地震による被害は様々な史料から読み取ることができ、特に伏見城の被害はよく知られている。一方でその城下の被害についてはまだよく分かっておらず、検討の必要があるように思う。

本研究では、伏見地震における伏見城下の被害状況を復元することを試みる。今回はその中でも武家地の被害について見ていくこととする。

２．伏見城の形成と城下の復元

伏見城は四つの時期に分けて理解されている。このうち伏見地震によって被害を受けたのは第二期（1594－1596）の、「豊臣期指月城」と呼ばれるものである。しかし伏見城についての研究はこれまで伏見地震後の第三期（1596－1600）の「豊臣期木幡山城」についてのものが主であり、第二期伏見城についてはまだよく分かっていない。また城下町の復元についての論究は徐々になされているものの、同様に第二期伏見城の城下についてはまだ検討の余地があると思われる。

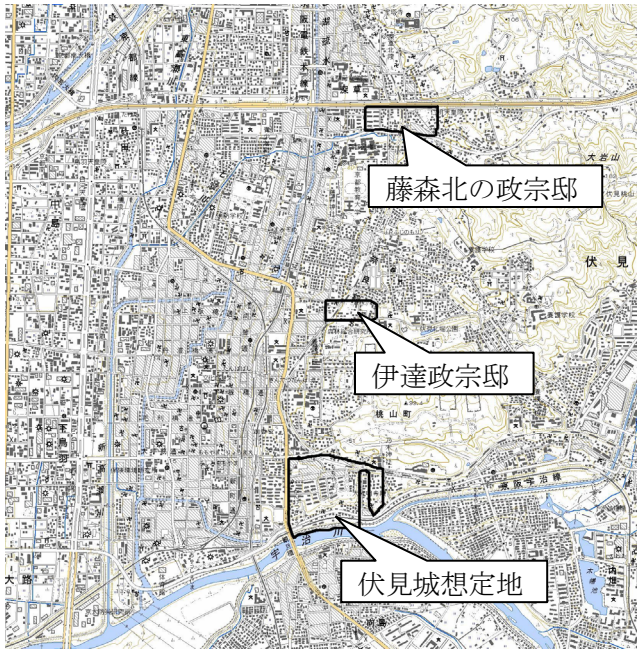
まず、第二期伏見城の築城過程と各大名の邸宅の場所を確認する作業を行った。伊達政宗邸についてみると、文禄四年十一月十五日（1595.12.15）付政宗文書によると以前に与えられた屋敷地の他に屋敷地を請うていることが分かる。この新しい屋敷地については、「藤森北ニ、田中ニ御さ候」と具体的な場所まで示されている。

３．伏見城下武家地の被害

伏見城下の武家地の被害についての記述を見ると、例えば『言経卿記』には「大名衆家共事外崩了」と記述されており、また『義演准后日記』では「其外諸大名ノ屋形、或顛倒、或雖相残、形計也」とあり、相当の被害を蒙っていたことが想像されるが、具体的に各大名邸がどのような被害を受けたのかは分からない。本研究では各大名の邸宅の被害について検討したが、ここでは伊達政宗邸の被害を紹介する。

伊達政宗の文書によると「誠此中之地震、絶言語候、いつかたも、大破可申様なく候」とあり、政宗邸（及びその周辺？）が何らかの被害を蒙っていた事が読み取れる。しかし文書にはその具体的な被害は記述されていない。そこでルイス・フロイスの年報補遺（1596 年 12 月 28 日付）を見ると「伊達（政宗）の邸宅は、百名の人々と厩舎にいた非常に立派な二十頭の馬とともにすべてが倒壊した。」とあり、その被害の状況を捉える事ができる。

この他、島津義弘邸なども確認したが、島津邸は「御屋作少そん□まいらせ候」とあるようにあまり被害を蒙っていないような邸宅もあったことが分かる。

４．まとめ

伏見地震による伏見城下武家地の被害状況を復元した結果、伏見城のような甚大な被害を必ずしも蒙っていないことが分かった。大名邸の位置や地形の影響もあるだろうが、もう少し伏見やその周辺の被害状況を確認する必要があるように思われる。